

サンクト・ペテルブルクの国際比較文明学会報告

高橋誠一郎

はじめに

サンクト・ペテルブルクの建設300周年を記念して、国際比較文明学会が2003年9月にロシアで開かれ、筆者はそこで発表を行うとともにノヴゴロドやプスコフなど「ロシア文明の源」を訪ねる学術旅行にも参加した。

筆者の主な関心は比較文明学の創始者の一人とも言われるダニレーフスキイなどの歴史家を輩出しているロシアにおいて、比較文明学の大会がどのように受け入れられるかということと、文学作品において深い歴史的考察を行ったプーシキンやその伝統を受け継ぐドストエフスキーなどとも深く関わるサンクト・ペテルブルクが学会においてどう位置づけられるかにあった。それとともに学会での発表が終わったあとに組まれていた学術旅行にはロシア建国の際の都市であるノヴゴロドやプーシキンゆかりの都市であるプスコフなどとともに、ロシア最古の都市として耳慣れない都市の名前も書かれていることにも強い関心をもった。

ただ、ロシアの経済が混乱から完全には脱し切れていない中で、国際比較文明学会と国立エルミタージュ美術館、ソローキン・コンドラチェフ研究所、ロシア科学アカデミー歴史部門などロシア側の5学術団体が共同して行うこのような規模での国際学会を果たしてきちんと乗り越えられるかにも強い不安もあった。実際、運営方法をめぐっては様々ないきさつがあったようで、最初の日程表とは異なるものとなり、レジユメを送ってからでもそれに対する応答がほとんどなく、さらには送金先の銀行に対する情報がなく入金されるかどうかは確信がありませんと日本の銀行から言われたり、ビザも出発間際までとれるかどうかもわからないなど、多くの不安を抱えたままでの出発となった。

しかし、様々な困難に直面して途中で参加を取りやめにした方も多かった中で、川窪国際委員長のご努力もあり、たいへんな苦勞の末にたどり着かれた松崎登氏をはじめとして14名（同伴者を含む）の方が日本から参加された。

後にロシア側の組織者からもらった資料によれば、ロシア人約110名の他に、ユネスコからの参加者やアメリカ、日本、アイルランド、スイス、フィンランド、スペイン、韓国などから44名（同伴者を含む）が参加していたが、日本人の参加はアメリカ人の19名に次ぐ規模だったのである。

そして、かなりハードなスケジュールのために体調を崩した時期もあったが、ロシア研究者である私にとっては、現在のロシアの政治・経済状況を知ることができるとともに、新しい「ロシアの理念」がどのように構築されようとしているのかをも知ることができ、きわめて有益な大会となった。以下、このときの大会と学術旅行の模様を簡単に報告する（本稿では原則として敬称を略す）。

1. サンクト・ペテルブルクでの学会（9月16日～18日）

サンクト・ペテルブルクでの学会に際して宿泊のホテルとなったのは、ネヴァ川沿いにありネフスキー寺院の向かいに位置する大きなモスクワ・ホテルであった。この寺院にはドストエフスキーやチャイコフスキー、さらにモスクワ大学の創設者ロモノソフなどの墓があるので、いわばロシアの歴史と直面しながらの学会となり、初日から船による市内観光が組まれており、時間的な制約のなかでの精一杯の歓迎ぶりがみられた。

2日目の午前中は、4つのグループに分かれて、国立エルミタージュ美術館、文化人類学・民族学博物館（クストカメラ）、科学アカデミー・東洋学研究所、科学アカデミー物質文化史研究所などを見学し、学芸員からの説明を受けた。

私はピョートル一世によって創設され、ロモノソフなどとも関係が深い文化人類学・民族学博物館（クストカメラ）を訪れた。残念ながら、日本人学校の教師ゴンザなどのデスマスクを見ることはできなかったが、日本人の研究者が多いのを知った係員からラクスマンからエカテリーナ2世に献上された、漂流民・大黒屋光太夫ゆかりの品物などや日本にも訪れたことのあるラングスドルフがアメリカで収集した物品のコーナーなどについて詳しく説明があった。国立エルミタージュ美術館での昼食を挟んで、美術館に収められているトラキアやギリシャの金製品の多くには専門の研究者も目をみはっていた。さらにこの後には噴水で有名なピョートル宮殿への小旅行が実施され、夜には主催者による晩餐会も用意されていた。

18日の10時から科学アカデミーの学術センター会議室で行われた発表は、「サンクト・ペテルブルク — 文明間の対話の都市」、「東西の諸文明と諸文化の交流におけるロシア」、「グローバル化と文明の未来」の3つの部会に分かれていた。しかし、いずれの部会も同じ会議室で行われたことや、ロシア側の実行委員会の組織が5つの学術団体で組織されていたために、予想通りそれぞれの組織から多くの発表希望者が出たので、その場で発表時間を大幅に制限されるなどの不備がでた。ただ、ロシア語と英語で行われた発表には、2名の同時通訳者がついていた。また、直前まではレジュメが印刷されているかどうか分からずに心配していた資料集は、下記のような2冊の論文・レジュメ集の形で渡され、発表時間の不足の不備を補ってあまりあるものだった。

たとえば、『東西の諸文明と諸文化の対話におけるサンクト・ペテルブルク』と題された191頁からなる論文・レジュメ集には、編者の一人であるソローキン・コンドラチェフ研究所所長のヤコベツ氏の論文「諸文明の対話と相互関係におけるロシア — 歴史的経験と21世紀の展望」が巻頭を飾っており、それに続く「第1部 サンクト・ペテルブルク — 諸文明と諸文化の対話の都市」と、「第2部 東西の諸文明と諸文化の相互関係におけるロシア」に、最初の2つの部会で発表された多くの論文のレジュメが収められていた⁴⁾。それゆえ、本書ではテーマの関係もあり、ロシア語によるロシア人の発表が多かったが、それらに交じて東京が今年400周年にあたることを紹介しながら、佐久間象山におけるピョートル大帝の改革やプスコフの修道士プロフェイの「第3ローマ・モスクワ」説にも言及して、トインビーの視点からロシア文明の特徴を考察した川窪啓資氏の「比較文明学的観点から見たサンクト・ペテルブルク」や私のレジュメも載せられていた。

私の発表「日本におけるドストエフスキー受容——サンクト・ペテルブルクのテーマと方法としての対話」では、「21世紀の人類の課題とドストエフスキー」というテーマで2000年に千葉大学で開催された国際ドストエフスキー集会での発表についても言及しつつ⁴²、日本の近代化と『罪と罰』の受容との関わりを分析して、第二次世界大戦の前には、「生存闘争」を自然の法則と捉えた主人公に対する共感を示すような解釈もあったことを紹介するとともに、ドストエフスキーが文学における対話という手法をとることによって、単一的な声ではなく、「多声的」(ポリフォニー)な世界を描きだし、そのエピローグでは主人公に「人類滅亡の夢」を見させることにより、それまでの「自己中心的な世界観」を批判していることを指摘した。

さらに、司馬遼太郎の長編小説『菜の花の沖』に言及しつつ、ナポレオン一世がロシアに侵攻した1812年に、戦争という手段の問題点を根気強く説明することにより、領海侵犯の咎などで捕えられていたゴロヴニンの解放に成功し、日露間で生じていた「文明の衝突」の危機を救った商人・高田屋嘉兵衛の「対話的な方法」の意義を考察した。そして、後期の江戸時代が有した高い文化水準が、ゴロヴニンの『日本幽囚記』によって紹介されたことが、後に来日してロシアの文化を伝えることになる宣教師ニコライにも大きな影響を与えたことを指摘して、江戸時代が有した多様性についても注意を喚起して、単一的な原理による「グローバリゼーション」の問題を指摘した⁴³。

最後の第3部会「グローバリゼーションと文明の未来」で発表された論文のレジюмеは、『グローバリゼーションと諸文明の運命——グローバリゼーションの新しいモデルと文明間の交流をめざして』と題され、4部からなる論文・レジюме集に収められていた(総頁数322頁)⁴⁴。これは科学アカデミーのチモフェーエフ教授、ソローキン・コンドラチェフ研究所のヤコベツツ所長、ブレッドソー国際比較文明学会長の編になるもので、多くの論文には発表者の紹介とともに簡単なロシア語訳がつけられていた。

この本の構成で眼を惹いたのは、第1部には「国連総会決議 56/6 (2001年9月9日) / ユネスコ一般声明 (2001年)、/ ロシア・イラン国際シンポジウム・アピール」などの文書が資料として載せられていたことである。さらに第4部では「著書紹介」として比較文明学関係のロシアの書物が紹介されていた。それはもう一冊の場合も同様で、その分野におけるロシアの「研究論文集紹介」も収められていた。

第2部として編集された「グローバリゼーションと文明間の対話」には、国際比較文明学の会員だけでなくチモフェーエフ氏 (Timofeev, T.T.) の「グローバル化する世界における文明間の相互関係の諸問題」やボンダレンコ氏 (Bondarenko, V.M.) の「グローバル社会認識のための方法論諸相」など多くのロシア人の論文も掲載されていたが、経済関係の専門家が少なかったせいもあり、このような視点からの「グローバリゼーション」の問題点を論じたものが多いとの印象を受けた。

この巻頭には国際比較文明学の形成を論じたブレッドソー氏 (Bledsoe W.M.) の「文明間の対話——トインビー、クレーバー、ソローキンとコンドラチェフ」が載り、チモフェーエフ氏の論文に続いて、「文明交流圏」という考えの重要性を説いた伊東俊太郎氏の「文明の対話と“文明交流圏”」のレジюмеが国際比較文明学会・終身名誉会長の肩書きの紹介とともに載って

いた。また前会長のメルコ氏 (Melko.M.) の論文「文明間の対立」は、文明の衝突説が戦争の原因になるのではなく、世界について考える手助けになるとする一方で、西欧、イスラムなどの他の文明と比較すると、ビザンツ文明や東アジア文明は攻撃的ではないと規定していたのが興味深かった。国連における「文明間の対話」の試みやイランのハタミ大統領による提案などを紹介しつつ、そのような対話の重要な例としてのシルクロードの意味を論じた服部英二氏の「シルク・ロードと文明間の対話」、やはり国連の活動に注目しながら、「不殺生・共存共生・公正」という3つの原則を説いた伊東俊太郎氏の提案にも言及した犬飼孝夫氏の「地球企業市民のための〈シヴィリゼーション・ミニマム〉とは？ 国連グローバル・コンパクトの可能性」のレジュメも第2部に掲載されていた。そして、第3部の「グローバリゼーションの時代における文化と宗教の対話」には、主に明治期における神道と国家神道との関わりを論じた奥山道明氏の「日本と西欧との対話および近代宗教制度の確立」が掲載されていた。

こうして、日本人研究者の発表はいずれも大きな関心をもって受け止められた。ただ、先にも記したように時間的な制限のために質疑応答の時間がなく、また、最後に第4部として予定されていた討議と会議総括の時間もあまりとれなかったのは残念であった。

しかし、その夜に日本人の研究者10人が集まってホテルのレストランで催された夕食会では、伊東俊太郎ご夫妻を中心に多くの会員や、サンクト・ペテルブルク大学大学院で研究中で通訳などの労をとってくれた大高さんや、ホームページで見て直接申し込まれた藤原さんも参加して、ロシア料理を食べながら楽しいひとときを持つことができた。

ことにロシアに対する様々な理解を「神話」と断じて新しいロシア像を示したヤコベッツ氏の「ロシア文明の過去と未来における北西ロシア」というきわめて興味深い論文に注意を喚起された伊東名誉会長の指摘を受けて、ロシア文明の位置をめぐる質疑応答の時間のたっぷりある議論が交わされ、なごやかな「円卓会議」となった。実際、次節でみるようにこの論文は「ロシア文明の源」を訪ねた学術旅行へのテーゼの如きものでもあったのである⁴⁵。

2. 学術旅行 (9月19日～22日)

サンクト・ペテルブルクでの学会の後に組まれた旅行は、外国人向けの観光旅行に少し学問的な色彩を加えた程度のものかと最初は思われた。実際、学術旅行への外国人研究者の参加者も半数以下であり、日本人も宮原ご夫妻と犬飼孝夫氏それに私の4人だけだった。しかし、ロシア人の講師を招いた「円卓会議」がほぼ毎日開かれた他、ときには早朝の行動開始から始まって終わるのが夜の10時半の夕食といった、いささかハードなスケジュールの中で「ロシア国家の建国」や「ロシアの理念」をめぐる、知的好奇心を刺激するきわめておもしろい論争を聞くことができた。

旅行の間には宮原一武氏から国際比較文明学会の組織などについて教えて頂いたり、犬飼氏とも自然環境問題やロシアの多神教などについて意見を交わすことができた。個人的にも長い間の念願でもあったロシア民話に出てくる蜂蜜酒を古風なロシア風のレストランで飲むことができて、付随的だと思われていた旅行からは、私にとってはこちらの方が収穫が大きかったとも感じられるほどに多くの知見をえることができた。まず、資料として渡された旅行スケジ

ユールを掲げる。

- 9月19日 レニングラード攻防戦記念パノラマ館、スターラヤ・ラドガ — ロシア最古の都市で古代ロシア最初の首都、歴史的記念物と考古学的発掘の見学、文明の対話の方法（スターラヤ・ラドガ1250周年記念円卓会議）、ノヴゴロド到着
- 9月20日 ベリーキー・ノヴゴロド — 歴史と文化の探訪、ロシア文明の歴史におけるノヴゴロド共和国（円卓会議）
- 9月21日 プスコフ、イズボルスク、ペチョールイ訪問
- 9月22日 ロシア文明の西の前哨地点（プスコフ1100周年記念円卓会議）、プーシキンゆかりの地訪問（未消化）、サンクト・ペテルブルク帰還

この学術旅行における議論の焦点の一つは、これまでロシア最古の都市とされてきたノヴゴロドよりも古く1250年前に創られたとされるロシア最古の町スターラヤ・ラドガ（Staraya Lagoda）の発掘現場と展示館の見学であった。

ロシアの建国にかかわる論争は、ピョートル一世によって創設された科学アカデミーに招かれたドイツ人の歴史家バイエルが『ロシア原初年代記』によって、ノヴゴロドがバイキングの一族であるバリヤグ族の長リューリクによって創られたとしたときから持ち上がっていた。このいわゆる「ノルマン説」に対してロモノーソフをはじめとするロシア人の多くの歴史家が、その後のリューリク朝ではスラヴ的な要素が強いことなどから、すでにロシアが高い文化的水準をもっていたことを示してロシアの独自性を示そうとしてきたのである⁶⁶。

このような中でスターラヤ・ラドガの発掘は、すでにノヴゴロドの建設に先立ってスラヴ的な要素の強い都市が造られていたことを示すものとして、高い関心を呼んでいるのである。たとえば、現在の発掘責任者のキルピーチニコフ氏（Kirpichnikov A.N.）は、今回の発掘はロモノーソフの説の正しさを証明するののかとの私の質問に対して、たしかにこの発掘成果はロモノーソフの先見性を実証するものであると強く語った。こうして「ノルマン説」の結論が出たのかと思われたのだが、ノヴゴロドで行われた「円卓会議」では、発見された品物はいずれもノルマン的な性格を持つとして、歴史学者から前日の結論に対する疑問が出されて、激しい議論となった。日本の王朝が朝鮮系の少数の「騎馬民族」によって創られたとする江上波夫氏の説は、激しい議論を巻き起こしたが、ロシアでも「ロシアの騎馬民族説」とでも名付けられるような議論がふたたび巻き起こっているのである。

さらにノヴゴロドやプスコフの「円卓会議」では、ハンザ同盟との関わりを論じた発表やプーシキンとミハイロフスコエ村との関わりが論じられるなど、「ロシア国家の理念」にかかわるもう一つの重要な議論もなされた。

すなわち、「ロシア最古の都市」であったノヴゴロドやプスコフは、国家の中心がキエフに移り、キエフ・ロシアが形成された後でも、ハンザ同盟に加入して、「ロシアの〈自由都市〉と呼ばれる共和政体の都市として発展し、政治的にもその後のロシア史上に例を見ない独自の一時期を画した」が、その後「分裂したロシアの再統一を進めるモスクワによって」、15世紀末から16世紀初頭にかけて次々と併合されたのである⁶⁷。

これらの都市の独自性については、歴史家だけでなくロシアの改革を試みたデカプリストたちが強い関心を抱いたことは知られているが、ロシア国家の統一性が重要視されるなかで、政治的な理由からこれらの都市にスポットライトがあてられることは少なかったのである。

しかし、これまではロシア最初の国家として位置づけられてきたキエフ・ロシアの中核をなしていたかつてのキエフ公国を受け継いだウクライナが独立し、新しい「ロシア国家の理念」が求められる中で浮かんできたのが、「ノヴゴロド・ロシア」あるいは「北西ロシア」の理念なのである。そして、それはモスクワ公国にも受け継がれたキエフ・ロシアの専制的な政治原理とはことなる民主的な原理であるとされたのである。

さらに9月21日に組まれていたイズボルスクやペチョールイへの旅行もきわめて興味深いものであった。すなわち、イズボルスクはロシアへの旅行案内書にも載っていない場所であるが、『ロシア原初年代記』によれば長兄のリューリクがノヴゴロドに座したのに対し、一番年下の弟トルヴォルが座したのがイズボルスクだったのである⁴⁶。ロシア人の若い女性研究者は思わず「これがロシアの美しさよ」と語ったが、なだらかな丘が重なりながらどこまでも続き、青々とした湖に白鳥が浮かぶ穏やかだが眼を見張るような美しい土地であった。また、古城の麓にわき出ている澄んだ泉のそばに立つ木々には、ちょうど日本のお神籤のように小さな布がいくつも巻かれていたのが印象に残った。一方、エストニアとの国境近くでは洞窟のあることで有名なウスペンスキー修道院を訪れたが、最近のロシア正教の復興を象徴的に物語るように建物などがきれいに修復されていたのが強く印象に残った。

結語

こうして、今回の学会ではハードなスケジュールのために発表や質問時間が制限されたという不満も残ったが、「グローバリゼーション」の問題点や国連の重要性を再認識することができるのと同時に、「ロシアの建国」に関する議論や「ロシアの理念」の現状をも知ることができ、きわめて有益なものとなった。

ただ、多くの外国人研究者の中でロシア語を話すのが筆者一人であったことや、単独行動主義的な原則を強めている現在のアメリカ政府に対する厳しい批判をしているフランスやドイツからの参加者が全くなかったのはさびしかった。川窪国際委員長はかつて総会で、国際比較文明学会でも日本人が日本語で発表できるように通訳をつける制度を作ってはどうかと提案されたことがあったが、今回はロシア側の発表者が全員ロシア語で発表していたのが印象に残った。先に言及した国際ドストエフスキー学会ではロシア語の他にも英独仏の各言語の使用が認められているが、梅棹忠夫氏がフランスで国際交流の必要性を通訳をつけて日本語で語っていたことを思い起こすならば、文明間の共存と多様性の重要性を訴える国際比較文明学会においては、将来、日本語も含めた形での使用言語の多言語主義が考えられる時期にきているのかとも思った⁴⁷。

また、ロシア文明の独自性を強く主張する一方で、国連の「多元的な原理」をも重視しながら、新しい「グローバリゼーション」のモデルを探そうとする今回のロシア側の姿勢や戦略は、ブッシュ・ドクトリンの一元的な原理に従う傾向が強いように見える日本の戦略と比較する

時、きわめてしたたかに映った。また、今回の学術旅行も単なる研究活動とせずに、外国人の研究者に対してロシアの新しい観光旅行の魅力をもアピールする場ともなっていたのには、功利的な色彩も多少感じたが、しかしそれはベレストロイカ後の激動の時期に、ロシアの経済が落ち込んでしまったことへの厳しい反省の中で、なんとか自立的な形でロシアの経済を改革しようとする力強い試みの一環として評価できよう。

日本の比較文明学の創始者の一人である山本新は、トインビーの考察を深めることによって、日本とロシアにおける近代化を比較して「欧化と国粹」の問題に気づき、「100年以上の距離をにおいて、二つの文明のあいだに並行現象がおこっている」と鋭く重い分析をした^{*10}。筆者はこれまでロシアと日本の近代化の比較を中心に研究してきたが、日本の今後の方向性を考える上でもロシアにおける比較文明学の状況を追っていくことは、この意味でも重要であり、今後も注意深く見守っていきたい。

注

- *1 "St.Petersburg in Dialogue of Cultures and Civilizations of East and West" edit.Yu.V.Yakovets, T.G.Bogotyeva, 2003 (in Russian)
- *2 Takahashi Seiichiro. The Acceptance of "Crime and Punishment in Japan : On the Theory of the Cycle of Westernization and Nationalism," The Twenty-first Century through Dostoevsky's Eyes — The Prospect for Humanity" ID Graal, Moscow, 2002 (in Russian)
- *3 Comparative Civilizations Review No.50 に掲載予定
- *4 "Globalization and Destiny of Civilizations — Towards new model of globalization and interaction between civilizations" , edit. T.T.Timofeev, Yu.V.Yakovets, Y.Bledsoe, 2003
- *5 Yakovets Yu.V., 'The North-western Russia in the Past and Future of the Russian Civilization' "St.Petersburg in Dialogue of Cultures and Civilizations of East and West", pp.98-107
- *6 高橋誠一郎「ロモノーソフの歴史観とその時代 — 女帝アンナの治世まで」『東海大学紀要 外国語教育センター』第13輯、1992年、112～113頁参照
- *7 『ロシア・ソ連を知る事典』平凡社、1989年、441～3頁、492頁
- *8 『ロシア原初年代記』訳者代表・國本哲男・山口巖・中条直樹、名古屋大学出版会、1987年、19頁
- *9 高橋誠一郎「司馬遼太郎と梅棹忠夫の情報観と言語観 — 比較文明学の視点から」『東海大学紀要外国語教育センター』第24輯、2003年参照
- *10 山本新『周辺文明論 — 欧化と土着』神川正彦・吉澤五郎編、刀水書房、1985年、30頁